

■シリーズ■

中学校武道

授業の充実に向けて

209

「今」の時代の武道授業を追い求めて
(ホンモノに触れる茗溪学園の剣道授業)

38

茗溪学園中学校高等学校 教諭 川崎臣

ラグビーと剣道を校技とする茗溪学園^{めいけい}では、「ホンモノに触れる」教育を大切にしながら、人間形成を重視した授業を展開している。女子剣道では、礼を重んじる心や挑戦する姿勢を育み、さまざまな課外活動を通して仲間とともに成長する機会を設けている。本稿では、高校での実践を含めた本校における剣道授業の実践や工夫、そして現代の生徒に向き合う指導者としての思いについて紹介する。



茗溪学園

本校の教育理念

1

本校は、1979年に「筑波研究学園都市」の研究者子弟の教育を目的として、筑波大学・東京教育大学の同窓会である「茗溪会」により創立された中高併設型一貫校です。開校当初から国際理解教育を重視し、正しい選択力と決断力、たくましい実行力、豊かな心を育む全人的・総合教育を実践しています。

また、スーパーサイエンスハイ

2 校技としてのラグビーと剣道

スクール（SSH）の指定校であり、理数系教育の発展に取り組んでいます。高校2年で行う「個人課題研究」（論文）は、生徒が自然科学の知識と人文・社会科学の知識を融合させ、新たな「総合知」を生み出し活用できる力を養うことを重視しています。こうした学びを通して、社会のさまざまな課題に対応できる次世代の科学技術人材の育成を目指しています。単に知識を身につけるだけでなく、考える力や判断力、問題解決力といった人間力を高め、将来のイノベーション創出に貢献する力を育む教育の中核となっています。

本校では、開学当初より男子はラグビー、少し遅れて女子は剣道を校技として、中1から高3の全生徒（高3のみ選択）が体育の授業で継続して取り組んでいます。ラグビーが選ばれた理由には、英国のパブリックスクールを手本とした寮生活を教育に取り入れようとした考えがありました。また、限られたスペースでも多くの生徒が運動量を確保できる競技であったことも理由の一つです。仲間を信じて体を張り、集団の中で自分の役割を理解し、時には自己を犠牲にしてもチームに貢献する精神を学ぶことが期待されていました。

一方、女子の剣道には、1対1で対峙する緊張感の中で「攻めて打つ」という姿勢を身につけること、また、相手を自分の技術向上のための協力者と考える「礼」の心を養うことが、社会で活躍するうえで役立つという考えがありました。かつては女性が社会で活躍する機会は限られていましたが、現在ではその機会も増えていきます。凛とした姿勢や態度は、大き

な強みになると考えています。

3 恵まれた環境に感謝

剣道が女子の校技となり、その授業や環境づくりにご尽力されたのが、前任の村嶋恒徳先生です。

生徒数の増加に伴い、剣道授業の一部で筑波大学の卒業生や大学院生に講師を依頼するようになりました。歴代講師には、教育剣道界で活躍されている先生方が数多くいらつしやいます。現在は筆者を含め6名体制で授業を担当していますが、その中にはトッププレーヤーとして活躍されている松崎賢士郎先生と竹中美帆先生も含まれています。

4 寒稽古と校技大会

現在は実施していませんが、新型コロナウイルス感染症による全国一斉休校前は、高校2年生全員

が入寮し、女子は寒稽古、男子はラグビーを5日間行っていました。寒稽古では、「わつしよい」の掛け声でランニング後、体操・素振り・切り返し・かかり稽古・指導稽古を実施していました。元立ちは筑波大学剣道部員のほとんどが協力してくださり、生徒たちに丁寧な助言を与えながら意欲を引き出してくれました。最終日には、つくば地区剣道連盟の協力を得て1級審査を実施し、高校2年生の女子全員が受審しました。

また、年度末には校技大会を実施しています。女子は剣道、男子はラグビーの試合を行います。剣道はクラス対抗の団体戦で、10人制による学年別トーナメント、勝ち上がり・負け下がり方式を採用し、各クラス最低2試合を行い、全員が出場できるルールとしています。試合は2分1本勝負で、勝敗が決定しない場合は判定としています。大会準備と運営は体育委員会が中心となり、審判は剣道部員が務めます。そのため1月以降の授業は試合や審判法を中心に扱うようになり、大会が近づ



校技大会の様子

くにつれて授業にも熱気が増してきました。大会の最後には、高校2年の優勝クラス代表者と教員代表による親善試合も行われます。教員代表は高校2年の学年団や、本校卒業生で剣道部ではなかった教員が出場します。出場する先生は、試合前に筆者から短時間の指導を受け、生徒に挑みます。その後は、松崎先生と筆者による立ち合いを披露して大会を締めくくります。

本校では、「ホンモノに触れる」「みんなで乗り越える、創り上げる」という姿勢を大切にしています。また、中高併設型一貫校であるため、中学生が高校生の活躍を身近に見ることができます。その中で、自分の憧れを早い段階から思い描き、それに向けて努力できる環境があります。

5 茨城の剣道と中学校授業の現状

茨城県は剣道が非常に盛んな地域であり、小・中学校、高校、一

般を含め全国大会でも優秀な成績を収めています。道場連盟加盟団体は119あり、つくば市内だけでも13団体が存在します。また、県内の六段以上取得者は900名を超え、授業協力者養成講習会修了者も120名以上にのびります。

本稿執筆にあたり、市内で剣道部を有する中学校10校に調査をお願いしたところ、9校が授業で剣道を取り入れており、さまざまな工夫を凝らしていることが分かりました。新聞切り、ボール打ち、剣道の動きを音楽にあわせて行う授業、ヘルメットと防護眼鏡を着用してスポンジ竹刀で授業をするなど、生徒が「楽しい」と感じられる取り組みが実践されています。一方、多くの学校が課題として挙げているのは、剣道具の不足や着装に時間がかかること、さらに剣道を専門としない教員が授業を担当している現状でした。

6 授業環境を整えるために



第 68 回全日本剣道選手権大会優勝の松崎賢士郎先生と筆者（右）の立ち合い



剣道部の部員と一緒に剣道具の整備や竹刀修理を行います

本校では校技大会があるため、剣道具は約150組、竹刀も約200本常備しています。年季の入ったものもありますが、多くは簡単な修理で使いが可能になるため、部員と一緒に手入れをしています。一度に多くの用具を揃えると費用負担が大きいです。少しずつ増やしていけばランニングコストはそれほど大きくありません。

また、これまで本校の剣道授業は、すべて剣道を専門競技としてきた専任教員と講師が担当してきました。これはラグビー、体操、柔道でも同様です。筑波大学とのつながりから、卒業生や大学院生を紹介していただける環境にあります。質の高い授業を展開できています。前述しましたが、多くの学校で剣道を専門としない先生方が授業を担当しています。剣道には、「授業協力者養成講習会」を受講し修了証を受けた方が授業を支援できる制度があります。学校が、各都道府県剣道連盟や教育委員会へ問い合わせる方法もありますが、持続可能な授業環境とするためには、近隣の道場等を活用し

た人材の紹介が有効だと思われます。資格保持者から助言を受けることで、剣道を専門としない先生方の負担軽減だけでなく、剣道への理解を深める機会にもつながることが期待されます。

7 授業について

私が教職に就いて30年になりますが、社会の価値観が変化の中で、教え方も常にアップデートが必要だと感じています。言葉遣い、生徒との距離感、安全配慮については、授業を受ける生徒や保護者の目線で見直すよう心掛けています。

剣道の基本動作は右手右足前ですが、日常生活ではあまり行わない動きです。幼少期から剣道を続けてきた私にとっては簡単な動作でしたが、習得に時間がかかる生徒に対して、かつては「やる気がない」「能力が低い」と考えてしまいうこともありました。しかし現在では、上達が遅くても真剣に取



【中学2年生女子】実際に防具を着けて面打ちの練習

り組む姿勢こそ、武道の精神そのものだと考えています。そのため、どのようにすれば上達できるかを工夫し、研究を重ねています。剣道ではパワーやスピードも重要ですが、そればかりを求めると無駄な力みが増えます。強すぎる打突は痛みにつながり、剣道を嫌いになる原因にもなります。その

ため、基本動作の習得では「力を抜いてゆっくり行う」ことも大切にしています。

また、技術指導では段階的な練習を重視し、一度に与える課題をできるだけ少なくしています。例えば面打ちで踏み込みと打突が合わない生徒には、速く、遠く、強く打つ意識を求めず、面が届く間

合いで、顔付近までの振りかぶりから、右足を浮かせた状態での打突練習を行います。こうすることで、「手と足を一緒に下ろす」という単純な運動となり、同調させる感覚がつかみやすくなります。小さな成功体験を積み重ねることで自信にもつながり、上手くできた生徒が多くなると授業の雰囲気も良くなり、生徒の意欲向上にもつながっています。

技術だけでなく、着装指導にも難しさがあります。「紐を結ぶ」という行為そのものも文化の一つですが、結ぶ機会が少なくなっていることに加え、教えてもらう機会も減ってしまっているように感じます。また、特性によって困難さを感じる生徒もいます。そのため、より簡単な結び方を用いたり、見学者にサポートを依頼したりしています。時には、教員から声をかけ、結びながら会話をし、良いコミュニケーションづくりを意識しています。

生徒が興味を示すのは技術や勝負だけではなく。礼法でも「蹲踞」が相手への敬意を表す姿

勢であることや正座での「左座右起」など、日常生活にも役立つ所作について、手本を見せながら説明を加えると「なるほど」という反応が返ってきます。袴を初めて着用する際には折り目に込められた「仁義礼智信・忠孝」の意味について説明し、防具についても価格や手刺し・ミシン刺し、曙光などの話題に触れることで、剣道文化への興味が広がるよう工夫しています。

8

おわりに

新しいことを始めるには、大きな勇気が必要です。だからこそ、剣道に興味を持ち、「やってみたい」「良いものだ」と感じてもらえる授業を心掛けています。剣道は何歳からでも始めることができます、生涯続けられる武道です。自分の子どもに始めさせたり、親子で一緒に始めたりして長く親しんでほしいです。そう願いながら、日々剣道を教えています。